ルターとメディア革命

獨協大学教授
青山 愛香

獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授。東京藝術大学大学院美術研究科修了（博士）。2010年、第23回辻荘一・三浦アンナ賞受賞。専門は15、16世紀のドイツ美術史。主著に『デューラーの遍歴時代――初期素描の研究』（中央公論美術出版、2009年）、訳書にハインリッヒ・ヴェルフリン著『アルブレヒト・デューラーの芸術』（中央公論美術出版、2008年）など。

今からまさに五〇〇年前、マルティン・ルターがドイツの町ヴィッテンベルクで宗教改革を推進し始めたが、その立役者としてルーカス・クラナハの存在を欠かすことはできない。クラナハはルターの友人であり、祭壇画を描いていた画家で、ルターとクラナハはそれぞれの子どもの名付け親になり、家族ぐるみで親交していた。クラナハは唯一人、ルターの肖像画を直接描ける立場におり、ルターとその妻、カタリーナ・フォン・ボーラのポートレートも多く残されている。

宗教改革の成功は、十五世紀半ばにヨハネス・グーテンベルクが発明した活版印刷の登場による「メディア革命」とともにある。活版印刷が誕生するやいなや三万点にのぼる書物が印刷されたというが、中でも活版印刷は聖書の普及において計り知れない役割を果たしている。

グーテンベルクが一四五五年に出版した有名なラテン語聖書「四二行聖書」をはじめ、活版印刷の揺籃期は文字だけで印刷されていた。そこから十年ほど経つと挿絵入り聖書が登場。一四八三年の「ニュルンベルク聖書」では、グーテンベルク式にダブルコラムで組まれた活字の間に、同じ幅を持つ横長の木版挿絵が挿入される新しいスタイルの聖書が誕生した。この「挿絵入り活版印刷聖書」という新しいジャンルに金字塔を打ち立てたのが、アルブレヒト・デューラーだった。一四九八年に出版したデューラーが手がけた十五枚の大型木版挿絵を含む『木版画連作黙示録』はセンセーショナルで、市場に出るやいなや、大変な反響を呼んだ。デューラーは十四枚の挿絵に黙示録の世界を創造。リアリティーとダイナミズムをもたせた表現で、集中的かつ劇的な物語場面を生み出した。しかしデューラーの挿絵は、テキストが途切れることなく印刷され、テキストと挿絵が直接に対応するものではなかった。

一方で一五二二年に出版した『ドイツ語訳新約聖書』で、ルターがクラナハに聖書の挿絵として求めたのは「言葉の視覚化」であった。ルターは民衆に聖書の言葉を分かり易く伝えることこそが大切だと考えていた。ルターのリクエストに応じるかたちで、クラナハはデューラーの挿絵を大いに参考にしつつ、聖書の各章ごとの場面に解体。二十二章からなるテキストに準じて、二十一枚の挿絵に描き直した。デューラーによる、複数場面を一つにまとめる「劇的で集中した」表現に比べ、ルターとクラナハが創り上げたテキストと挿絵を結びつける手法は、決定的に言葉の理解を促すことに成功した。さらに、ときに過激な表現を取り入れることでローマ・カトリックへの批判、すなわち反教皇を視覚的に広めることに成功した。

例えばクラナハは、黙示録十七章第四－七節に登場する多頭の怪物の上に乗るバビロニアの淫婦を描く際に、彼女の頭上に、ローマ教皇を象徴する三重のティアラの帽子を被せることで、反ローマ教皇、反カトリックのプロパガンダの要素を含んだ。この場面が描写された九月聖書の初版三千部はすぐに売り切れ、その三ヶ月後に改訂版である十二月聖書が増刷されたが、その際にはこの表現があまりにも過激だったために、この冠がカットされたことはあまりにも有名である。

ルターは神を信じるのみ＝すなわち信仰義人論が唯一救済される方法だと説いていたわけだが、このルターの中心的な教えを視覚化したものが、「律法と福音」である。この図像では、旧約の律法の世界を左側に、そして一本の樹木を隔てて右側に新約聖書の恩寵の世界を対比させることで視覚化し、旧約の預言者モーゼが指さす十戒において、原罪を背負う罪深い人間が、死神や悪魔に追い立てられて、地獄へと落ちてゆく姿が描かれている。一方の新約の世界では、イエスの犠牲と復活により、人々の魂が救われる場面が見取り図的に描かれている。この図像は、木版画、板絵とさまざまなメディアで描かれ、ルター聖書の扉絵としても繰り返し印刷されることで、ヨーロッパ中に広がっていった。ルターの教えの根本を明確に視覚化することに成功した代表的な作品である。

このように、ルターもクラナハも、当時の活版印刷による最先端メディアの有効性と活用方法を熟知しており、改革の推進に大いに利用した。そしてクラナハの息子もまた、自分の父親がルターと並んで宗教改革において果たした役割を、誇らしげに強調してみせていったのである。